

海外インターンシッププログラム

派遣国・都市名	アメリカ ワシントン州 シアトル
研修先	兵庫県ワシントン州事務所
プログラム実習期間	2022年8月22日～2022年9月16日
学部/研究科・学年	国際文化学研究科1年

インターンシップ就業実習 報告書

本インターンシップは、アメリカのシアトルにおいて約1ヶ月間実施されました。勤務先は兵庫県ワシントン州事務所とバラード高校の2カ所であり、それぞれの勤務先で2週間ずつ過ごす予定でした。しかしながら、現地滞在中にシアトル市内の公立学校の教員によるストライキが発生したことにより、高校での勤務がわずか3日に短縮され、結果的に3週間半ほど兵庫県ワシントン州事務所での業務を行いました。

事務所では、大きく分けると（1）企業リストの作成（2）グランピング施設掲載の準備（3）観光スポット記事の作成（4）県物産PRのための資料作成（5）Japan Weekで行うクイズの作成（6）ネブラスカ州知事選に関する調査の6つの業務を行いました。

当事務所は、兵庫県とワシントン州のビジネスと文化の両面における交流を促進しており、（1）や（2）を通してビジネス面の業務に携わりました。はじめに、ワシントン州のスタートアップ企業およびVC/CVC企業のリスト作成を行いました。マーケティングに関する知識が不十分な私にとって、「スタートアップ」「VC/CVC」といった単語の意味を調べることからはじめ、リサーチを通してその実態を徐々に把握することができました。実際に自分で企業情報にアクセスし、ゼロから資料を作成することで、兵庫県の企業とワシントン州の企業を結ぶ誘致活動の基礎を学びました。

同様に、グランピング施設の掲載準備に関しても、欧米のグランピング専門サイトを詳しく調査し、兵庫県のグランピング施設を海外のウェブサイトに掲載する上でどのような点に留意すべきであるのかということ考察しました。調査を行っていく中で、海外のグランピングでは自然を楽しむアクティビティに重点が置かれていることに気づき、インスタ映えが重視されている日本のグランピングとは異なる情報が必要になることがわかりました。この調査については結果と考察を報告書にまとめ、事務所に提出しました。

一方、文化面では、SNSを通して兵庫県の観光スポットを定期的に紹介する業務があり、今回のインターンシップでは、兵庫県内の観光スポットを紹介する記事とInstagram用の投稿を作成しました。私は出石皿そばのお店でアルバイトをしていることから、出石に関する思い出があり、記事の中では出石を取り上げました。記事は英語で書く必要があったため、一度自分で原稿を書き、その後事務所で勤務されているネイティブの方に添削していただき、そのアドバイスをもとに文章を修正しながら仕上げていきました。アドバイスをもらう際には、より自然な英語の使い方を学ぶとともに、英語における文彩的な表現についても知ることができて非常に新鮮でした。

兵庫県には有名な観光地だけでなく、県の工芸品や伝統品も数多くあり、そのような物産品をJTBが運用するARTI ZANというサイトでPRするための資料作成も行いました。私自身、兵庫県の出身ではなく県の物産品をほとんど知らなかったため、この業務を通してそれらの特徴や歴史について詳しく知る機会となりました。資料は英語で作成する必要があり、物産品のサイトによって英語の情報量に差があ

ったため、各物産品の特徴を自然な英語で表現するのに苦労しましたが、伝統的な物産品を海外に広めていく上で使う表現や言い回しを学びながら、パワーポイント資料を作成しました。

本来であれば、ここまでの業務を終えたところで高校での勤務が開始する予定でしたが、シアトル市内の公立学校教員によるストライキの影響により、事務所で勤務が継続されました。学校開始日までの業務期間では、Japan Week で行う姫路城クイズの作成とネブラスカ州知事選に関する調査を行いました。姫路城クイズでは、日本の城についてあまり知らないアメリカの方でも楽しめるような工夫が必要であり、事務所のネイティブの方と何度も打ち合わせをくり返しながらか作成しました。クイズの作成ではレイアウトにもこだわり、クイズを通してより多くの人に姫路城について興味をもってもらえるようなものを考案しました。ネブラスカ州知事選については、兵庫県とネブラスカ州が経済連携協定を結んでいることから事務所にとって重要な業務であり、知事選の状況と有力候補の経歴調査および現職の活動内容について調査を行いました。この調査業務では、所長より資料作成における留意点について直々に教えていただき、記載すべき情報とそのまとめ方について詳しく学びました。

高校での勤務については、いつ学校が始まるか誰もわからない状況の中、本プログラム最終週の火曜日にストライキがようやく終了し、翌日の水曜日から3日間ほど高校での業務を行いました。高校では、ひらがなやカタカナを書くのに困っている生徒に対して実際に書き方を英語で教えながら、日本語を書くときのポイントを伝えました。生徒たちにはもっと上手く書けるようになりたいという熱意があり、生徒自身が書いたひらがなやカタカナを私が読めるかどうか尋ねる生徒も複数名いて、日本語や日本文化に興味を持っている姿が見られました。高校の日本語の授業は5つのレベルに分かれており、そのうちのレベル2～5のクラスでは私の高校生活について日本語で発表を行いました。生徒たちの理解度を考えると、英語を半分くらい使った方が良さそうにも思いましたが、ネイティブの言葉を聞く機会はめったにないのでぜひ日本語で行ってほしいと担当の先生に依頼されたため、すべて日本語で発表しました。発表で用いたスライドには日本語と英語を併記し、漢字にはすべてひらがなをふり、日本語のレベルに関係なく理解できるように工夫を施しました。レベル2のクラスでは事前にクイズを記したプリントを用意しておき、生徒たちはクイズの答えを埋めながら日本の高校生活について理解しているようでした。レベル3や4のクラスでは、日本の高校生活について議論する活動を行い、生徒たちからは「日本では親の期待が高いから高校生は塾に行って大学受験の勉強を頑張っているんだと思う」といった鋭い意見も述べられ、日本について深く考えるきっかけを与えることができたように思いました。

感想および意見

大学院生活が始まったばかりの4月後半に、「アメリカでインターンシップを行うプログラムがあるけど、行ってみない？」と指導教員の先生に声をかけてもらったのがすべての始まりでした。学部生のときには、国際人間科学部のGSPプログラムでイタリアに渡航したり、友人と海外旅行をしたりと、もともと海外での異文化体験が好きでしたが、学部3・4年次にはコロナ禍の影響で全く海外渡航ができず、少し悔いが残っていました。大学院に入学してからも、海外渡航はまだできそうにないと半ば諦めていたのですが、本プログラムがアメリカのシアトルで実際に行われるということを聞き、プログラムへの応募を即決しました。

すぐに応募しようと思ったのは、単に海外に行きたかっただけでなく、大学院修了後に大学職員や公務員といった進路を考えている私にとって、このプログラムは非常に魅力的だったからです。実際には、

報告書に書いたような業務を行いながら、兵庫県という自治体が海外の拠点でワシントン州との交流を促進する業務に携わることができ、就職活動を考える上で貴重な経験となりました。業務を通して、公務員として働く上で必要な資料・文書作成スキルや立ち振る舞い方などを、事務所で勤務されている方々から直接学ぶことができ、非常に有意義な日々を過ごすことができました。事務所での使用言語は奇数日が日本語、偶数日が英語ということで、英語を使いながら業務を行ったことも新鮮で良い経験となりました。さらに、英語を使用言語としながら事務所以外の方との会議に参加することもでき、日本にいたるだけでは決して得ることができない語学経験を積むことができました。

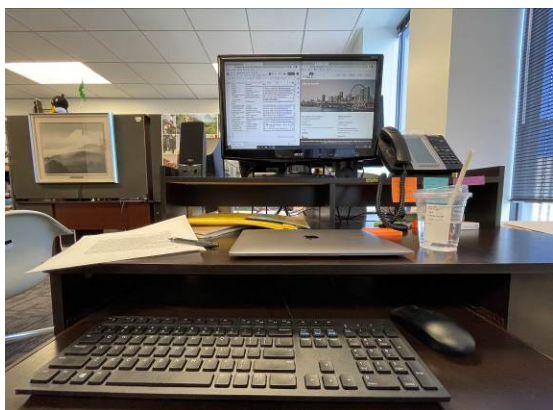
もともと、大学に入るまでは英語圏で長期留学をしてみたかったものの、留学先で学びたいことがなく、海外での生活を断念していましたが、本プログラムを通してアメリカで1ヶ月間の滞在が実現し、英語ばかりの環境に身を置きながら生きた英語を学ぶことができました。事務所では、ネイティブの方から文書や資料の中で使う表現を直接学び、バラーダ高校では高校生との会話を通して容赦ないスピードの英語を体験しました。まだまだうまく英語が話せるわけではないのですが、なんとか伝えようと必死になって英語を話したこの1ヶ月を無駄にしないように、日本に帰国してからも語学の勉強を継続させていこうと思いました。

英語のコミュニケーションで最も苦労したのは、ホームステイ先での会話でした。このプログラムでの滞在先は基本的にホームステイであり、私は73歳のおばあちゃん（といってもまだまだ元気でもとてもパワフルでした）と2人で生活していました。はじめに会ったときの衝撃は今でも覚えているのですが、おばあちゃんのとにかく独特なアクセントとイントネーションの言葉は英語と思えず、最初の2、3日は聞き取るのに苦労しました。しかし、その後は耳が慣れはじめて問題なく聞き取ることができるようになりました。その一方で、私の英語が日本語なまりの英語であったことから、ときどき私の英語が通じずに困った場面もありましたが、なんとか伝えようと思い、より英語らしく発音することを心がけながら話しました。そのようなときでも、ホームステイ先のおばあちゃんは最後まで私が伝えようとしていることを理解しようとしてくれて、伝わったあとには発音のポイントを丁寧に教えてくれました。ホームステイでの生活は何不自由なく過ごすことができ、本当に恵まれていました。数えればキリがないほどエピソードはあるのですが、**Green Lake** を一緒に散歩したり、勤務初日に事務所までついてきてくれたり、夜はNetflixを一緒に見たりと、とても優しく安心して生活することができました。その中でも、日本について尋ねられることが多く、例えば日本の保険金制度や皇室制度、そして日本語の漢字やひらがななど、数多くの質問をされました。ときには、複雑な政治制度の質問もされ、少々うろたえましたが、大学生活4年間で幅広く学んでいたことを生かして、なんとか説明することができました。このホームステイでの経験を通して、海外に行く前に日本についてしっかりと知っておくことの重要性をより一層実感し、今後も日本に関する一般的な知識をさらに充実させていこうと思いました。

週末には、シアトル市内を思う存分観光することができました。シアトルと聞くと、イチローのマリナーズくらいしか知らなかったのですが、海と坂に囲まれた街の中には多くの観光名所があり、充実した休日を過ごしました。個人的にはスターバックス1号店に行けたことやスペースニードルの展望台に上ってシアトル市内の街並みを一望できたことがとても良い思い出として残っています。シアトルはアメリカの北西部に位置しており、足を伸ばすとカナダにも行くことができるので、滞在中にはカナダのビクトリアに日帰り旅行をしました。ビクトリアはシアトルとまったく異なる街並みや雰囲気をもっている街で、イギリスに影響を受けた歴史的背景が随所に感じられました。

本プログラムに参加して良かったと思えるのは、海外での業務経験を積むことができたこと、公務員としての就職を考える上で貴重なインターンシップを行えたこと、海外の異文化を感じながら充実した時間を過ごすことができたことです。まだ完全にコロナ禍が収束したわけでもなく、円安ドル高という渡米には不利な状況の中でも、シアトルに滞在したこの1ヶ月の経験はかけがえのないものとなりました。提案して下さった指導教員の先生、事前準備から渡航後まで常に気にかけて下さった職員の方、快く送り出してくれた家族、そしてシアトルで出会った事務所の皆様、ホストファミリー、高校の先生には大変感謝しております。この経験を自らの進路に活かすことができるように、就職活動をがんばっていきたいと思います。

● オフィスの様子



● 高校での発表



● ホームステイ先のご飯



● スペースニードルから見たシアトル市内



● スターバックス一号店店内の様子



● カナダ・ビクトリア観光

